

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	三重県
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	伊勢市立倉田山中学校					
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	5	6	0	15	27人
生徒数	151	164	226		541	

研究の概要

1. 研究主題

個に応じた指導を目指した指導方法・指導体制の研究

2. 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

・3年生の数学

個々の能力差が大きく、理解の状況に差が出やすい教科であり、生徒一人ひとりの実態に応じたきめ細かな指導の充実を図る必要がある。

・1年生の英語

1年生は中学校で始める英語学習の基礎となる学年であり、また英語は理解の状況によって学力差が出やすい教科であるため、1年生で基礎基本をしっかりと身につけておく必要がある。

(2) 年次ごとの計画

(平成15年度)

テーマ

基礎学力の向上を図るための指導方法の工夫改善

研究の見通し

(数学科)

個々の生徒一人ひとりに対して出来るだけ適切な指導をするために、少人数編成の授業を行う。そのためには、生徒の習熟の程度に応じてコース分けをし、基礎・基本の確実な定着を図るための指導方法及び指導体制を研究する。

(英語科)

少人数編成の授業において、コミュニケーション活動の活発化・充実化をめざす中で、コミュニケーション能力がどれほど向上していくかを研究する。

研究の内容・方法

(数学科)

3年生の全クラスを対象に、生徒の習熟の程度に応じて1クラスを2つのコース「基礎コース」と「応用コース」に分けて指導する。コース分けは、生徒一人ひとりが選択希望することを基本とし、「基礎コース」は10人程度にしぼり、各単元内容の基礎・基本の確実な理解と定着を主眼とする。「応用コース」は各単元内容の基礎・基本の確実な定着とともに、数学的な見方や考え方に重点をおき指導する。

2つのコースの指導方法を工夫改善することにより、生徒がどのように変容するかを検証する。

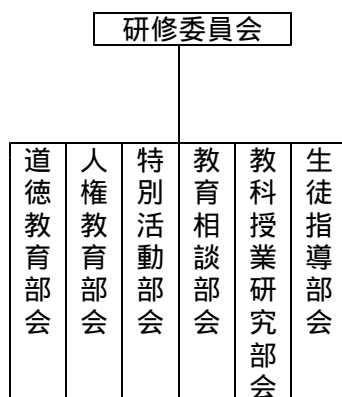
(英語科)

1年生の1学級を機械的に出席番号で2グループに分けて、別教室で別の教師が指導することで、コミュニケーション活動を活発にする。

(平成16年度)

詳細は未定であるが、平成15年度の内容を引き続き研究していく予定である。

(3) 研究推進体制

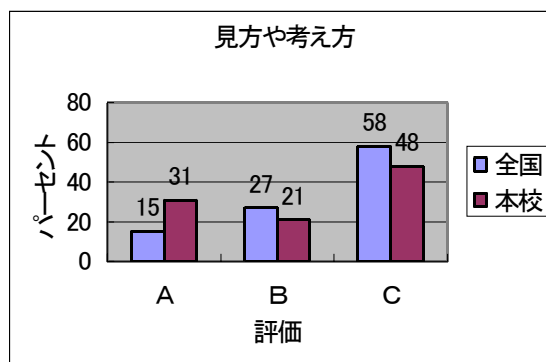
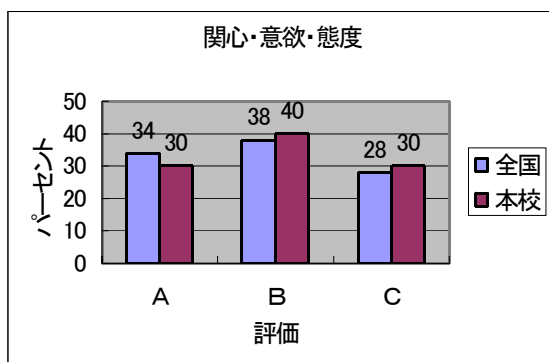
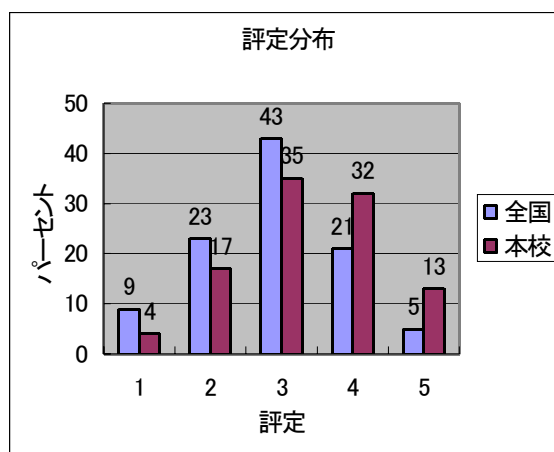


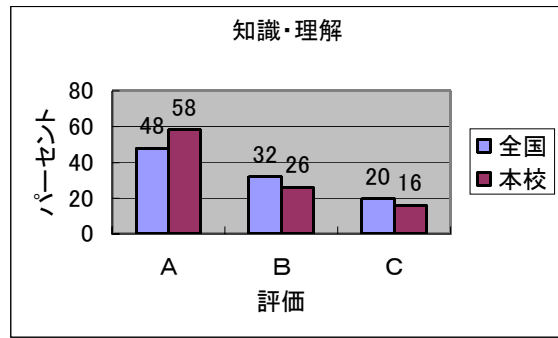
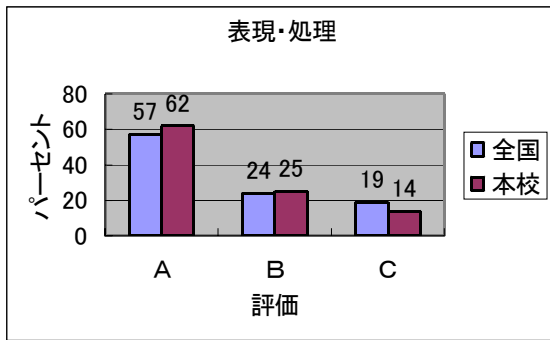
数学科、英語科の教師、特に該当学年を担当する教師を中心に研究を進めていく。
 必要のある場合はそれぞれの各教科授業研究部会全員で協議し、また該当学年グループ
 の教師にも理解・協力を得て進める。

平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究の成果
 (数学科)

C R T 観点別到達度学力検査 (H 1 5 . 2月実施)





上のグラフは現3年生が昨年度2月に実施した数学の教研式観点別到達度学力検査（CRT）の調査結果である。

この学力検査はペーパーテストでの調査であるため、「関心・意欲・態度」の観点は測定が難しく参考程度にとどめることとするが、当校の生徒は全国の生徒の傾向とほとんど変わらない傾向を示している。

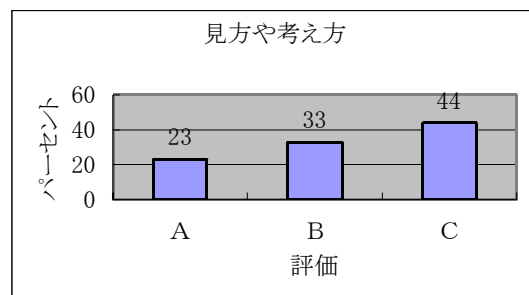
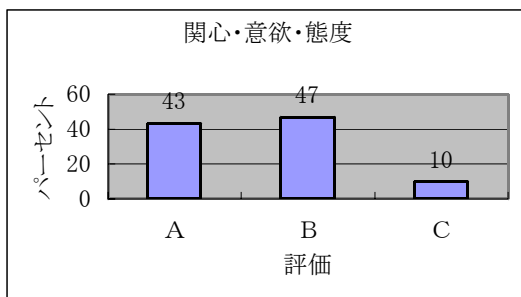
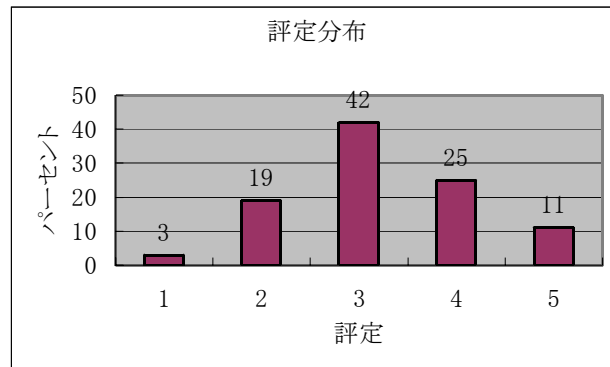
評定についてはグラフのとおりであり、評定5，評定4（十分満足できる）は全国を上回る結果となっている。しかし、評定2，評定1（努力を要す）の生徒が21%存在し、この生徒に対して基礎・基本の確実な定着が望まれる。

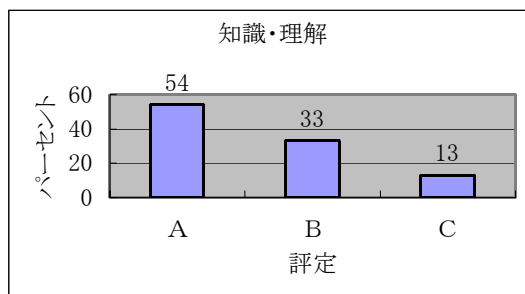
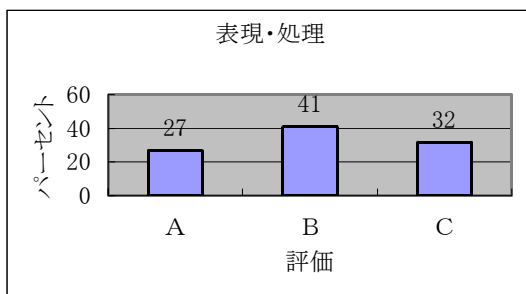
3観点については、全国を上回る結果が現れた。「表現・処理」「知識・理解」の観点は力がある生徒の割合が多いといえるが、評価Bの下位、評価Cの生徒に対して計算力、基礎的な概念や法則など基礎・基本の確実な定着を大切に指導したい。

また、気になる点は「見方や考え方」が「表現・処理」「知識・理解」の観点に比べ全国と同様当校の生徒にとっても最も苦手な観点である。この観点は、新しいことを発見していく直感力や発想力にもつながる大切な部分であり、特に「応用コース」でその伸張を図りたいものである。

以上のように分析し、1クラスを「基礎コース」と「応用コース」の2つに分けて研究を始めた。

当校観点別評価及び評定





このグラフは3年生三学期の当校観点別評価及び評定の結果をまとめたものである。今年度の観点別到達度検査（CRT）は2月中旬に実施したが、その結果はまだ出ていない。

CRT 検査は到達度を調べるための検査であり、当校の評価方法と同じであるが、若干評価基準が異なるため一概に比較はできないがおおよその傾向は同じである。

- ・評価分布はCRT検査とほぼ一致している。評定2，評定1の生徒が22%存在し、基礎・基本の確実な定着が望まれる。
- ・「関心・意欲・態度」の観点は客観的な評価が難しく、指導者の主観を通して、生徒を総合的にとらえる場面が多いので評価が高く出る結果となった。教師は授業を通して数学に対する関心や意欲を高める努力をし、生徒がそれに応えた結果である。
- ・「見方や考え方」は、数学にとっては大切な観点である。他の観点到比べて苦手な観点である。授業では時々課題学習を取り入れ「数学的な見方や考え方」の育成にも力を入れ興味・関心を高めている。評価A、評価Bを合わせると56%であった。
- ・「表現・処理」の観点は当校の評価基準では少し厳しい結果となった。生徒は計算問題、文章問題、図形の証明など計算した過程や考えた過程を地道に記録しようとしないうえ、結果として評価に影響をおよぼしたと考えられる。
- ・「知識・理解」の観点は高い傾向を示しているが「基礎コース」で一人ひとりを大切にしながら基礎・基本の確実な定着を図った成果である。

その結果次のような生徒の姿があった。

- ・少人数指導は、生徒一人ひとりの学習活動が把握しやすく、また少人数であるために生徒からのつぶやきや質問なども出やすく把握しやすいため、生徒とのコミュニケーションがとりやすい。また、一人ひとりの理解度、定着度がよく把握できるので、その実態に応じた学習活動や学習支援が適切な時に出来る。
- ・少人数で学習すると雰囲気も柔らかいため、素直な意見が出やすく個々の生徒に密着した指導ができ、数学の苦手な生徒には効果的であった。
- ・「応用コース」においては、基本的な内容の復習に時間を取られないので、いろいろな問題を通して教科書には載っていない解き方などを学習することができ、数学の得意な生徒にとっては興味・関心を高めることが出来た。
- ・昨年度と今年度、伊勢市教育委員会より基礎学力向上推進事業の研究協力校の指定を受け、当校数学科のテーマ「基礎・基本の確実な定着と思考力の育成」に沿ってモデル案を作成し、二学期にはこのモデル案を基に互いに授業公開し、「基礎コース」と「応用コース」双方で検証授業を行い指導モデルを作成した。

今年度は、途中からではあるが、数学科教員の特別配置があり2年生でも後期から習熟度別少人数指導ができた。

（英語科）

- ・1年生の英語では38名のクラスを2グループに分け、別々の教師・教室で行っているが、同一生徒が38人の授業と19人の授業とでは、ずいぶん様子が異なる。少人数の授業の中ではわいわいとにぎやかによく意見を言う生徒が、38人の授業の中では静かにすわっているだけで、存在感が感じられないことがあった。たとえ自分たちのクラスであっても、38人と19人とでは、授業の雰囲気の違いがあり、少人数の方が生徒はのびのびと活発であり、英語を話しやすいムードである。
- ・少人数での授業は、38名全員で行う授業よりも、1時間内での生徒の発表の機会が増える、音読や暗唱など全員の確認ができる、自己表現などの場面で数多くの生徒の質問に応じることができる、机間指導が十分行える等、あらゆるサポートが可能で、生徒の英語力を向上さ

せる上で大変メリットが大きい。

- ・英語はコミュニケーションの教科なので、英語をたくさん使って、英語に慣れることが大切である。英語を使うことをおっくうに感じているようでは、英語力や会話の力はつかない。だから授業の中で、音読や暗唱やペアでの会話などの発表の機会が多くなる少人数編成授業は、生徒の英語力を伸ばすために必要である。
- ・今年度の結果から38人の一斉授業よりも英語力がついたであろうと考えられる。
- ・各学期に授業研究の場を設定し、コミュニケーション活動に視点をあてた授業を行い、教師が互いに参観しあうなかで、活発な授業ができるよう研修をすすめた。

2. 今後の課題

(数学科)

- ・コース選択の際、その都度コースの趣旨の確認を行い指導するものの、「基礎コース」と「応用コース」の選択が不適切である生徒もいる。コース選択のアドバイスが課題である。
- ・「関心・意欲・態度」の観点は客観的な評価が難しく、指導者の主観を通して一人ひとりの生徒を総合的に観察する場面が多いので、担当者が交代すると評価が変わってしまうという問題がある。一人が一年間を通して固定して指導する方がよいとも考えられる。しかし、一年間を通して担当するとなると学級担任をしても教科指導でまったく指導しない生徒がでてくるとい問題もある。
- ・「基礎コース」と「応用コース」それぞれの指導方針で授業を行っているが、教える内容、進度とも工夫はしているものの、同じ時間数の中では視点が異なり、ずれが生じてくる。
- ・両コースとも同じ基準で評価をしているが、教える内容に多少の違いがあり、同じ評価方法や同じ問題でテストをすることが適切なのかどうかについて今後検討する必要がある。
- ・当校の観点別評価基準及び評価方法は試行段階であり今後とも改良をしていかなければならない。

(英語科)

- ・週3時間という少ない授業数で効率のよい授業を行っていくためには、今後ますます少人数の授業の実施が期待される。英語学習の基礎となる1年生だけではなく、2年生でも3年生でも実施したい。
- ・当校では2, 3年生の数学で習熟度別少人数編成の授業を行い各自が「基礎コース」と「応用コース」のどちらかを選択しているが、英語科でも習熟度別編成について検討していかなければならない。
- ・1クラスを2グループに分けているが、分け方は機械的に出席番号で分けたクラスなので、学力差が極端にでたりすることがある。1年生であるので習熟度別にする段階ではないが、2グループをどのように分けるかは今後の課題である。
- ・複数の教師が指導するので、そのための教具(CDやピクチャーカードなど)を購入するための経済面での問題や、時間割の調整の難しさなどもある。

学力把握のための学校としての取り組み

- ・定期テスト(各学期の中間・期末テスト)・・・教科書を中心に出题し、日頃の授業の内容が理解できているかを確認する。
- ・実力テスト(三学期)・・・広い範囲から出题し、これまでの学習が定着しているかを確認する。
- ・CRTテスト(観点別到達度学力検査)・・・これまでの指導を振り返り、今後の指導の効果を高めるための方策を見つける。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及
中間報告の段階であるので、検討中である。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校

【学校規模】 3学級以下 4～6学級
7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上

【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
その他

【教科研究】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
保健体育 その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無